Osaka University Knowledge Archive

Title	帝政末期ロシアにおける保守的言論の展開：露仏接近とユダヤ人政策をめぐる立場の相違を手掛かりとして
Author(s)	竹中, 浩
Citation	阪大法学. 2022, 72(3-4), p. 87-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89709
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

帝政末期ロシアにおける保守的言論の展開

――露仏接近とユダヤ人政策をめぐる立場の相違を手掛かりとして――

竹中　浩

一　はじめに

近代の政治的ジャーナリズムを論じるとき、枠組みとしてしばしば利用されるのが保守派とリベラルの対比である。通常、内政に関して、保守派は伝統的秩序の維持を、リベラルは自由の制度的保障と参加の拡大を重視すると考えられている。これについては帝政期のロシアを対象とする場合も同様であり、そこでは改革に対する積極性が保守派とリベラルを分ける一つの基準とされる。しかし、この基準が常に有効に働くわけではない。アレクサンドル二世の治世には農奴制の廃止をはじめとする大改革が行われたが、保守派とされる人々の中で、貴族の特権と社会的役割を重視するP・Φ・ファジェーエフらは大改革がこれを弱めようとしたことに反撥し、特にミリューチンの軍制改革に対して批判的であった。これに対してスラヴ派は、彼ら自身も関与した大改革を積極的に評価していた。保守派とされる人たちの中にも、改革に対して異なった立場があったのである。

政治制度に関わる改革を視野に入れると問題がさらに複雑になる。政治改革が他の改革の延長線上にあるとは限

らないからである。帝政期のロシアでは専制という伝統的統治形態の縛りが強く、その変更を主張することについては、リベラルとみなされる人々も概して慎重であった。また、いわゆる保守派の中でも大改革を批判した人たちは、改革を主導した官僚の専横に対する批判をこれと結びつけ、対抗策としてイギリスの貴族院をモデルとする代表制を求めた。(1) 専制をどのように理解するか、何をそれと不可分のものと考えるかについては、保守派の中にも異なった考え方があったのであり、政治改革への積極性という観点から保守派とリベラルを区別することは必ずしも容易でない。

こうした点を考慮するならば、いわゆる保守派について論じようとするとき、単にリベラルとの対比においてその性格を規定するだけでは不十分であることは明らかであり、それとは別の要素についても考えることが必要になる。その一つが議論を発信する際の姿勢である。一般に、メディアで活動する人々の関心は言論を通じて政府と社会に影響を与えることにある。しかし、政府と社会が常に同じ方向を向いているわけではない。政府の最大の関心事は、内政においては政治体制と治安の安定であり、対外政策においては目の前の具体的国益の実現であるが、それらが常に一般国民に対する訴求力を持つとは限らない。治安や国益と一般国民の意識や感情とはしばしば鋭く対立する。それゆえ、同じように保守的言論人とされる人であっても、政府の志向と社会の志向のどちらにより大きな関心を持つかによって立場を異にすることがありうる。

内政に関してこの矛盾が特に現れやすいのがユダヤ人政策である。国内の少数派に対する差別と非寛容、特に反ユダヤ主義は保守派に共通する特徴とされる。しかし、反ユダヤ主義といってもその現れ方は必ずしも一様でない。ユダヤ人が攻撃の対象になるとき、大別して二つの理由が挙げられる。一つはユダヤ人が正教徒を搾取し、それによって富を蓄えていることであり、もう一つはユダヤ人インテリゲンツィヤが革命をはじめとする政治的害悪をも

たらすことである。このどちらに比重をかけるかによって保守派の中の反ユダヤ主義の性格が異なってくる。それはまた専制護持の姿勢における特徴とも関わることになる。

対外政策に関しては保守派の中の多様性がより顕著に現れる。常識的には、保守派は対外強硬派と同一視されることが多い。しかし、帝政期のロシアでは、保守派とされる人々が常に一致して対外強硬論を唱えたわけではない。保守派は総じて他国に侮られることを嫌うが、同じように国の威信を重視してはいても、国民の共感や反撥に重きを置く人もいれば、軍事的・経済的国益を重視する人もいる。軍事的・経済的国益を重視する場合でも、それをどのような枠組みによって守るかについては異なった考え方がありうる。対外政策に関するいわゆる保守的メディアの立場を、単に強硬派として一括することはできないのである。

一八四一年、英仏露普墺五カ国の条約によって、黒海の出口であるボスポラス・ダーダネルス両海峡の通過がオスマン帝国以外の国の軍艦に禁じられた。もとよりそれによって最も強い制約を受けるのはロシアであった。さらに一八五六年三月、クリミア戦争を終わらせるために結ばれたパリ条約により、ロシアは黒海に艦隊を保有することを禁止された。アレクサンドル二世の前半においては、この黒海条項の廃棄が重要な外交課題となった。ゴルチャコーフ外相は、廃棄を実現するためには国際的孤立を避ける必要があるとの認識から、ヨーロッパ協調を外交の基本方針としていた。これを批判した代表的な保守の論客がB・П・メシチェルスキーである。後にアレクサンドル三世やニコライ二世と親しく交わり、政府の外交方針に強い影響を及ぼすことになるメシチェルスキーは、[2] ヨーロッパの国際法秩序を絶対視しなかった。国家という有機体を法の枠にはめるべきではなく、国益は国際法に優先するとして、彼は国権主義の立場から一貫してゴルチャコーフ外交を批判した。メシチェルスキーにおいて保守主義と反ヨーロッパ主義は不可分であった。[3]

一八七一年に黒海条項が廃棄されたのちも海峡通過に対する制約は残った。これを取り除くために、ボスポラス海峡を扼するコンスタンティノープルへの影響力を強めるべきであるとの主張がロシア保守派の中には強く現れた。その前に立ちはだかったのがイギリスである。ロシアがオスマン帝国に強いてコンスタンティノープルを自由にすることは、イギリスの艦船がスエズ運河を通って本国とインドの間を航行する上で脅威であった。イギリスはオスマン帝国の後ろ盾となり、ロシアがコンスタンティノープルとボスポラス海峡に影響力を強めることを許さなかった。ヨーロッパの最強国であるイギリスは、他国と同盟を結ばず、巧みな外交によってロシアを牽制した。

これはロシアのすべての保守派にとって苦々しいことであったが、それにどのように対処するかについては異なった考え方があった。メシチェルスキーは、ゴルチャコーフがプロイセンに対して宥和的であることを批判したが、統一されたドイツに対する見方は概して好意的であった。(4) 一八八一年に即位したアレクサンドル三世のもとで外相になったギールスがドイツとの良好な関係に基づく外交を展開すると、彼はこれを支持した。他方、保守的とされる言論人の中にはドイツと距離をとろうとする立場もまた存在した。その中で最も大きな影響力を持っていたのがM・H・カトコーフとA・C・スヴォーリンである。彼らはギールス外交に批判的であり、外交方針の根本的な転換を求めた。

本稿では、アレクサンドル二世時代の後半以降、保守的メディアにおいて生じた立場の分岐を、メシチェルスキー、カトコーフ、スヴォーリンという三人の論客の対外観とユダヤ人観に注目しつつ概観する。(5) それによって、政府と言論人の関心の違いとともに、保守的メディアの中にある多様性を具体的に例示することができると考えるからである。

二　汎スラヴ主義とブルガリア問題

オスマン帝国の領土であるバルカン半島には、スラヴ系の、あるいは非スラヴではあるが正教を信じる諸民族が住んでおり、十九世紀の前半、その中ではオスマン帝国の支配から独立しようという運動が生まれていた。それに道徳的支持を与えることは、相手がオスマン帝国であるかぎりヨーロッパ対非ヨーロッパの図式で整理のつくものであり、このためのイデオロギーとして機能した汎スラヴ主義も、十九世紀半ばまではヨーロッパの中に対立をもたらすものではなかった。ハプスブルク帝国内のスラヴ人、例えばチェコの知識人の中にも汎スラヴ主義を唱える人々がいたが、彼らは民族的自律を求めることはあっても必ずしも政治的独立を要求することはなく、ロシアがオーストリアとの関係を犠牲にしてまで肩入れする政治的理由も存在しなかった。(6)

一八六六年の普墺戦争においてオーストリアが敗北すると、ハプスブルク帝国内でハンガリーの地位が相対的に高まり、一八六七年のアウスグライヒによって国の形が大きく変わった。帝国内のスラヴ人も政治的発言力を強めるにいたる。こうした情勢を反映して、オスマン帝国内のスラヴ人とオーストリア＝ハンガリー帝国内のスラヴ人とを結びつける秩序構想が現れるとき、汎スラヴ主義は政治的色彩を強く帯びるようになった。(7) 政治化した汎スラヴ主義は当然に本来の文化的原理との間に不整合を孕むことになる。例えばスラヴ世界とヨーロッパの敵対に比重を置くダニレーフスキーのスラヴ連邦構想は政治的地域統合の色彩が強く、スラヴ世界を統一する文化的原理や民族的特徴は、西欧との対比を際立たせるための類型論に帰着させられた。ダニレーフスキーにとって、スラヴ系の言語を母語とするか否かはそれほど重要ではなかったのである。(8)

一八六〇年代の後半、プロイセンを中心としたドイツ統一が視野に入り、これに対する警戒心が生まれるととも

に、汎スラヴ主義は反ゲルマン主義的な色彩を帯びることになる。貴族主義的な人々の中にも、このような立場から汎スラヴ主義を支持する人々が出てくるようになった。[9] 代表的な論客がファジェーエフである。もともと貴族主義には民族主義的な色彩が希薄であり、帝国内にはポーランド人やドイツ人の貴族もいる以上、これは自然なことであった。かつて貴族主義の新聞とされた『ヴェスチ』は親独的で汎スラヴ主義には冷淡であり、一八六七年にモスクワで開催されたスラヴ会議に対しても冷ややかな見方をしていた。[10] ファジェーエフの立場は明らかにこれとは異なっていた。彼は今やオスマン帝国のスラヴ人問題とオーストリア＝ハンガリー帝国のスラヴ人問題とは不可分になったとして汎スラヴ主義に共鳴し、特にオーストリア＝ハンガリー帝国内のスラヴ人との関係強化を重視する。[11] ただし、ファジェーエフの汎スラヴ主義は、文化的信条よりは政治的な関心に基づくものであり、スラヴ系の民族だけでなくバルカンに住む非スラヴ人の存在も同様に重視していた。[12]

汎スラヴ主義の盛り上がりは、一八七七年から翌年にかけての露土戦争において頂点に達する。このとき、ロシアの国民感情は激しく高揚し、スラヴ諸民族の解放を掲げるИ・С・アクサーコフの言論が光彩を放った。スラヴ人の虐殺や抑圧に対する人道的反撥もあって、ロシアの世論は汎スラヴ主義的空気に染め上げられ、それに異を唱えることはきわめて困難になった。[13] このとき、最も活発で扇動的な報道を行うことによって発行部数を飛躍的に伸ばしたのがスヴォーリンの新聞『ノーヴォエ・ヴレーミャ』である。[14]

汎スラヴ主義が持つ意味内容の曖昧さも、多くの異なった立場を糾合するのに効果的に働いた。一八六三年のポーランド蜂起以来、国権主義的な言論を代表する存在であったカトコーフは、バルカンのスラヴ人の窮状よりもロシアによるコンスタンティノープルと海峡の支配を重視していた。[15] メシチェルスキーも同様であった。彼はゴルチャコーフが他の列強の意向を過剰に顧みることを嘲り、オーストリア＝ハンガリーを恐れる必要はないとして、

セルビアとともに戦うことを支持したが[16]、その立場を汎スラヴ主義と呼ぶことができるとしても、それはスラヴ人への共感とは無縁なものであった[17]。

露土戦争後、メシチェルスキーは冷静さを取り戻し、ドイツと良好な関係を維持した上での孤立主義の立場に復した。しかし、露土戦争後のバルカン情勢はドイツとの関係に揺らぎを生じさせずにはおかなかった。原因になったのがブルガリア問題である。もともとブルガリアとロシアの間には心情的な紐帯があり、ロシアはブルガリアの保護者をもって任じていた。露土戦争後、ブルガリアは一旦独立するが、親ロシアのブルガリアを通じてロシアがバルカン半島に勢力を拡大することをイギリスやオーストリア＝ハンガリーが望まなかったため、一八七八年七月のベルリン条約でブルガリアはオスマン帝国内の公国にとどめられ、ブルガリアの一部とされていた南部の東ルメリア、西部のマケドニアが切り離されてオスマン帝国にとどまることになった。これはブルガリア人の間に激しい反撥を招いた。

初代ブルガリア公になったアレクサンダルはドイツのバッテンベルク家出身で、ロシア育ちでアレクサンドル二世の皇后マリア・アレクサンドロヴナの甥であるということを除けばロシアとのつながりを持たなかったため、保守派からは猜疑の目を向けられていた。一八八一年に即位したロシア皇帝アレクサンドル三世は従弟である彼をひどく嫌っており[18]、『モスクワ報知』の編集者として政府に強い影響力をもっていたカトコーフも、一八八五年一月十三日の同紙社説で、ロシアによって解放されたブルガリアにおいてドイツ人が君主となっていることは、バルカン半島とドイツの関わりを強め、良好な関係を築いている独露の間に紛争の火種をもたらすおそれがあるとして懸念を表明していた[19]。

一八八五年九月、東ルメリアでブルガリアとの統一を目指す反乱が起き、国際的な危機が発生する。ベルリン会

議で作られた枠組みそのものが危殆に瀕することになった。ロシア外務省は、統一そのものには反対ではなかったものの、現状の急激な変更を望まず、ブルガリア・ナショナリズムの暴発を抑えにかかった。十一月、セルビアがブルガリアに侵攻する。戦闘は大方の予想に反して一週間足らずでブルガリアの完勝に終わり、東ルメリアからブルガリアが自発的に撤退する可能性は消失した[20]。ロシアが求めた原状回復は望むべくもなく、ブルガリアの統一が既成事実として追認されることになった。これはロシアの威信に決定的な打撃を与えた。特定の国が仕組んだことではなかったにせよ、この事件は国際的な紛争解決の枠組みに対するロシア国内の不満を高めずにはおかなかった[21]。

十二月三日の『モスクワ報知』社説で、カトコーフは、この出来事をイギリスの思惑に沿ったものとみなし、ブルガリア建国のためにどこよりも犠牲を払ったロシアに事前に相談することなく、イギリスの道具となって行動したブルガリア公アレクサンダルを非難した[22]。アレクサンドル三世のアレクサンダルに対する憤りも激しく、彼は執拗にその退位を求めた[23]。一八八六年八月、アレクサンダルは退位するが、それによってロシアとブルガリアの関係は好転するどころかいっそう悪化した。ブルガリアのスタンボロフ首相はロシアに対して敵対的な政策をとり、国内の親露派が甚だしく抑圧されるにいたった。

ロシアのメディアは多くがブルガリアの軍事占領を要求した。政府に配慮してそれまで抑制的な立場をとってきた『モスクワ報知』も同様であった。カトコーフにとってもこの出来事は許容しがたい屈辱だったのである[24]。メシチェルスキーの『市民』のみが軍事占領に反対した。ビスマルクのドイツを除き、オーストリア＝ハンガリーやイギリスのような腹黒い国々が、ロシアがブルガリアの泥沼にはまり込むことを密かに願って、占領に支持を与えている。これに乗るのは両国の思う壺であるとして、メシチェルスキーは不干渉を説いた。ロシアの国益と威信を守るには戦艦二隻をブルガリア沿岸に派遣すれば十分であるとされた[25]。結局ロシアは武力行使を行わず、十一月十六

日、ブルガリアと国交を断絶するにいたった。

三　露仏接近

この頃、フランスとの接近が外交上の選択肢として浮上していた。普仏戦争において煮え湯を飲まされたフランスには、左右の別なくドイツに対する強い復讐願望があり、一部にはロシアとの提携によってドイツに報復しようという動きも生じていた。しかし、フランス政府は慎重であった。ロシアが独仏衝突の際に三帝同盟に縛られてドイツに味方するようなことさえなければ十分であると考えていたのである。もとよりロシアのギールス外相も独仏の紛争に巻き込まれることを警戒していた。

メシチェルスキーは現状の変更に消極的なギールス外相の方針を支持していた。メシチェルスキーの見るところ、ロシアにとって唯一の国家の敵というべきはイギリスであった。イギリスは一貫してロシアに好意的でなく、ヨーロッパ全体をロシアに敵対させようとしていたからである。[26] またフランスとの間には政治思想における断絶がある。メシチェルスキーは、革命と共和主義の国であるフランスとの接近によって、一八一四年のときのようにロシア国内に伝統的な統治形態を変更しようという気運が盛り上がることを恐れていた。[27] これに比べれば保守的なドイツは相性のよい相手であった。民族の統一を実現しただけでなく、強力な統治権力の原則、保守主義の原則を体現するビスマルクを恐れる必要もなかった。[28]

カトコーフの立場は異なっていた。もともとカトコーフはドイツに対して特別敵対的であったわけではない。八〇年代の前半には、メシチェルスキーと同様、彼もドイツとの良好な関係を維持することがロシアにとって望ましいと考えており、ビスマルクの内政を賛美していた。[29] しかし、ブルガリア危機以後、カトコーフはドイツとの間に

距離をとるようになり、それに伴ってフランスとの関係強化に前向きになっていった。当時、フランスでは対独強硬派のブーランジェ将軍が力を伸ばしており、これを支持するフランス愛国者同盟のポール・デルレードら右派がカトコーフに接近した。仲介に立ったのはユダヤ人の生理学者エリー・ド・シオンであった。[30]

一八八六年七月、オーストリアのガスタインで独墺の皇帝が会見したことは、両国の親密さを内外に印象づけた。この機を捉えてカトコーフは七月三十一日の『モスクワ報知』で、ロシアを独墺に従属させようとしているとしてギールスを批判し、暗に三帝同盟への反対を表明した。[31] カトコーフの攻撃を受けて辞任したブンゲの後を襲って蔵相に就任したヴィシネグラツキーのもとで、ロシアがドイツ製品に対し高率の保護関税を課するようになり、両国の間に経済摩擦が生じると、カトコーフはドイツに対してさらに強硬な態度をとるようになった。[32]

当初『ノーヴォエ・ヴレーミャ』はどっちつかずの立場であった。もともと民衆の気分を捉える力と国際情報を武器とするスヴォーリンは、カトコーフやメシチェルスキーのように、皇帝をはじめとする政府要人との親密な関係に依拠して原則的な立場を打ち出す人ではなかった。広い範囲の読者を有するスヴォーリンにとって、世論の敵意が向かっているのがイギリスやオーストリア＝ハンガリーである間は、特にドイツを敵視して外務省との間に摩擦を生じさせる必要はなかったのである。[33] それゆえ『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は政府の外交政策を直接批判することに慎重であった。五月十九日には、深刻化する露仏対立においてロシアは局外にあるべきであるとする匿名の「編集者への手紙」が掲載された。ロシアは独仏と良好な関係を維持する必要があり、両国の間でバランスをとるべきである。ただし現在の国益が将来もずっと国益であるとは限らない。現状ではロシアはドイツと近い関係にあるとしても、将来フランスとの関係が緊密になる可能性も頭に置かなければならないとされた。[34]

しかし、『モスクワ報知』と同様、八六年の夏になると『ノーヴォエ・ヴレーミャ』にも次第に親仏的な論調が

現れてくる。七月十七日の論文では、ブルガリア危機においてドイツがロシアに対し好意的な態度をとらず、むしろイギリスと手を結ぶ可能性があること、これに対してフランスは、従来のようにイギリスの後に付き従う態度を変更する可能性があることが指摘された。その後も『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は、ドイツとの関係改善の可能性を否定するところまではいかなかったものの、独墺は自分たちの利益のためにロシアを利用しているとして、両国から距離をとることを勧めた[35]。スヴォーリン自身も日記にギールスに対する軽侮の言葉を書きつけている[36]。年が変わると『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の態度はより鮮明になった。ドイツのヨーロッパ支配を許してはならないとの論調が現れ、独仏の紛争においてロシアは、中立であるにしてもドイツよりフランスに対して好意的な立場をとるであろうとされた[37]。さらに『モスクワ報知』と歩調を合わせ、ギールスに対する批判を強めていった[38]。

もともとドイツやオーストリア＝ハンガリーに対してあまり信を置いていなかったアレクサンドル三世も、一八八七年の初めには三帝同盟を更新しないという意思を固めていた。フランス政府の姿勢も積極化した[39]。三月八日、カトコーフはそれまで公にされていなかった三帝同盟の存在を明かすという挙に出た[40]。アレクサンドル三世は外交方針への行き過ぎた容喙に怒り、『モスクワ報知』に発行停止の処分を下した。アレクサンドルはフランスがロシアとの提携に何を期待しているかについてよく理解しており、オーストリア＝ハンガリーに対する不信の念を強めながらもドイツとの絶縁に踏み切れなかった[41]。六月にはドイツとの間に再保障条約が結ばれ、カトコーフが排除しようとしたギールスは結局最後まで外相の地位にとどまることになる。七月には失寵によって傷ついたカトコーフが世を去った。カトコーフの死後、メシチェルスキーの外交への影響力は相対的に強まった[42]。

それでも独露の懸隔拡大に向かう流れが止まることはなかった。一八八八年六月、ドイツでヴィルヘルム二世が即位し、対露強硬派のヴァルダーゼーが参謀総長に任じられると、両国の関係改善はさらに困難になり、逆に露仏

接近の気運が高まった。翌八九年八月十四日の『ノーヴォエ・ヴレーミャ』には、今やフランス人を友と呼ぶことができ、共通の利益は紙の条約より重要であるとの論文が掲載された[43]。スヴォーリンは一八八九年九月から『ノーヴォエ・ヴレーミャ』に「小さな手紙」と題するコラムを書き始め、そこで自身の意見を比較的直截に語っていたが、彼は九月二十日のこの欄で、フランス文明は最も血生臭く無神論的な革命的諸原理の産物であるとするメシチェルスキーの言葉に異を唱え、フランスが君主主義の長い歴史を持つことを説いた。「最も血生臭く無神論的な革命的諸原理」は恐怖政治の時代に一時的に現れたものにすぎず、それ以後フランスはほとんど常に学芸のあらゆる分野で目覚ましい成果を挙げてきた。パリ・コミューンで革命的諸原理の復活が見られたものの、第三共和政はそれを鎮め、君主主義的な色彩の強い憲法を導入した。屋外での集会を許可するなど、イギリスがフランスより広範な政治的自由を認めていることを見ても、スヴォーリンにとって君主制か共和制かという違いは決定的なものとは考えられなかった[44]。

ドイツに関しては、スヴォーリンは各地の歴訪を予定しているヴィルヘルム二世の積極性に注目する。そこには明確な目的と将来に向けての計算があるとして、彼は新帝の野心に対する警戒を説いた。三国同盟はオーストリア＝ハンガリーとイタリアをドイツの従属国にするものである。ドイツには、これをさらに広げ、「ヨーロッパ連邦」を作ってヨーロッパ全体を「ヨーロッパ皇帝」の下に統合しようという夢がある。その実現は困難であるとしても、そのような構想の存在を意識させるだけでドイツにとっては十分意味がある。ロシアは事態を注視し、独立の立場を守らなければならないとされた[45]。メシチェルスキーはこれが思い過ごしであると言う。ヴィルヘルムの外遊は若い皇帝のお披露目にすぎない。ヨーロッパの国々はドイツを憎んでおり、ドイツとの同盟に進むとしても必要に迫られてのことであって、それを知っているドイツが無謀なことをするはずはないとされた。スヴォーリンに

とってこれは楽観的過ぎる見方であった。各国が相互に警戒し合っているという現実に目を向けるべきことを説くスヴォーリンは、ヴィルヘルム二世のコンスタンティノープル訪問をスルタンへの単なる挨拶と考えるわけにはいかなかった[46]。

一八九〇年三月、ビスマルクが外交の表舞台から姿を消すと、ロシアではドイツに対する警戒がいっそう強まることになる。翌年、フランスとの提携が合意されると、カトコーフの協力者であったC・C・タチーシチェフは『ノーヴォエ・ヴレーミャ』に寄せた論文でこれを政治的同盟とみなし、称賛した。このときまでに『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は既に反独的姿勢を鮮明にしていたのである。メシチェルスキーはこれに反対し、合意は単に相互の好意を表明したものに過ぎないとした[47]。メシチェルスキーにとってフランスとの同盟は、長年にわたるドイツとの良好な関係を破壊し、ロシア人の血によってフランスを守る愚かな企てであった[48]。

とはいえ、メシチェルスキーはドイツとの政治的同盟を求めたわけではない。統一後急速に軍備増強を進めるドイツに対して、メシチェルスキーも幻想をもってはいなかった[49]。国際政治においては恒久的な敵も味方もなく、あるのは恒久的な利益のみである。あらゆる同盟は必ず戦争に道を開く。たとえドイツとであろうと同盟は無益である。ロシアはヨーロッパで唯一、自分の力だけで強国としてやっていける国であり、イギリスに倣ってヨーロッパ国際政治への参加を極小化すべきであった[50]。

四　ユダヤ人問題

ドイツとの経済摩擦によって、ロシアは公債の引き受け先をドイツからフランスに変更する必要が生じた。その際、大きな比重を占めることになるのがロチルド家などのユダヤ系銀行資本であった。この問題はロシア社会の中

のユダヤ人問題とも微妙に関わることになる。

ユダヤ人を嫌う感情はロシア社会の中に広く見られた。保守派の中には特にそれが強かった。ユダヤ人は強欲な搾取者であるだけでなく、ロシアの伝統的生活様式の変質をもたらす外来者とみなされることが少なくなかったのである。しかし、保守派とされる人々がすべてそのような見方を前面に出したわけではない。例えばカトコーフにはいわゆる情緒的な反ユダヤ主義は希薄であり、この点で彼の立場はアクサーコフをはじめとするスラヴ派の人々とは異なっていた。カトコーフにとって大切なのはユダヤ人をロシア化することであり、その障害になっているとして、彼はユダヤ人を差別する法律の廃止を求めた。ロシア帝国において、ユダヤ人を隔離することでその文化的影響の拡散を防ぐという発想は、カトコーフにはなかったのである。むしろユダヤ人の小世界を打ち壊すべきであった。

カトコーフは、ロシア化のためにはロシア語の習得が不可欠であるにもかかわらず、ロシア語を十分に操れないユダヤ人が少なくないことを重く見た。その原因はロシア人社会からの制度的な隔離にある。何よりも居住制限をやめ、ユダヤ人の居住地を帝国全土に広げるべきである。居住制限の緩和を、高等教育を受けた者に限定する必要はない。[51] また、ユダヤ人を特別な教育機関で学ばせることは、隔離を助長し、旧態依然たるユダヤ教的伝統を温存するがゆえに有害でしかない。共通の世俗的教育によってロシア的精神を植え付ける必要があった。カトコーフは高等教育を受けたユダヤ人の増加を脅威とは考えなかった。むしろそれはユダヤ人の閉鎖性を壊し、ロシア化を促進していくはずであった。[52]

同じ国家の枠の中でロシア人とユダヤ人が共生することは歴史的に不可避であり、ユダヤ人をロシア帝国の良き臣民として受け入れるべきである。このようなカトコーフの姿勢は、彼の時代には同化がなお主知主義的に理解さ

れていたことと関係があろう。制度的な条件も重要である。一八八〇年代までは、ユダヤ人が政治的・社会的に不利な扱いを免れるためには正教に改宗すればよく、形式的な改宗は直ちにそのアイデンティティを脅かすものではなかったのである。[53] しかし一八九〇年代には、ユダヤ人は異教徒という以上に特別な民族として扱われるようになった。正教に改宗してもその扱いは変わらなかった。[54] それとともにユダヤ人アイデンティティについての理解も変化していく。反ユダヤ主義がより本質主義的な形をとるようになる。

メシチェルスキーのユダヤ人に対する敵意はカトコーフよりも強い。また、彼の反ユダヤ主義には政治的な性格が強く表れていた。メシチェルスキーは、自由主義やニヒリズム、社会主義といった西欧の有害な観念をロシアに持ち込む存在として、ユダヤ人の中でも特にインテリゲンツィヤを警戒した。ユダヤ人インテリゲンツィヤはロシアの専制と教会の敵である。[55] 革命と共和主義の祖国たるフランスと同様、メシチェルスキーはその中にロシアにとっての政治的脅威を見出したのである。それゆえ、カトコーフとは異なり、メシチェルスキーにとって、高等教育機関におけるユダヤ人の比重増大は憂慮すべき問題であった。才能に恵まれたユダヤ人が創造的な分野でロシア人にとって代わるのに伴って愛国的な思想や原理が衰退し、代わってコスモポリタニズムや無神論が蔓延ることになる。これを防ぐため、ユダヤ人をギムナジアや大学に入れないようにし、他の分野に活動の場を求めさせるべきであるとされた。

ただ、ユダヤ人の影響力拡大と戦う上で、ユダヤ人を隔離することが有効であるとは、メシチェルスキーも考えてはいなかった。同化を進めるためにユダヤ人の共同体を廃止し、子弟の教育もロシア人と共通の学校で行わせるべきである。[56] 居住制限も有効な手段ではないとされた。[57] この点ではメシチェルスキーとカトコーフの間に大きな違いはなかったといえよう。

スヴォーリンの反ユダヤ主義的言説は、カトコーフやメシチェルスキーのように明確な政治的信条に基づくものというよりは、民族的偏見の直截な表明であった。一八八三年、彼は『ノーヴォエ・ヴレーミャ』で、ユダヤ人がロシアからいなくなればロシアにとって幸いだとまで言っていた。[58] 一八九〇年代に入り、ロシアと経済的に対立したドイツの金融資本の代わりに、ユダヤ人アルフォンス・ド・ロチルドのようなフランスの銀行家にロシア公債を買ってもらう必要が生じたとき、スヴォーリンは金だけを基準に物を考えるロチルドの利己主義はロシアの国益とは両立しないと説き、ユダヤ人銀行家への過度の依存に反対した。[59] さらに一八九五年二月、スヴォーリンは、公債借り換えを仲介して巨利を得たとして、カトコーフと近く、露仏接近に重要な役割を果たしたシオンに対して辛辣な攻撃を加えた。その際スヴォーリンは口を極めてユダヤ人の狡猾さや拝金主義を罵った。ユダヤ人は働く一般庶民を視野に入れていないとして、彼は自分が平民的な立場に立っていることを強調している。[60]

フランスの国論を二分したドレフュス事件において、本当の情報漏洩者としてエステルアジが告発されるにいたったとき、スヴォーリンは真相の究明以上に、ドレフュスを支援する勢力を貶めることに熱心であり、騒ぎが大きくなることで得をするのはフランスの混乱を煽っているドイツ人であると説いた。[61] 一八九八年一月、エステルアジが軍法会議で無罪になると、スヴォーリンは、ドイツへの情報提供のかどで有罪となったドレフュスを支援するためにユダヤ人がいかにその巨大な財力を行使しているかを論じ、かつてジャン・カラスの冤罪を晴らすために尽力したヴォルテールと比較しつつ、この件で軍の不正を告発したエミール・ゾラの信用を失墜させようとした。[62] それによってチェーホフのような良心的知識人が彼のもとを去ったが、読者の支持は失わなかった。スヴォーリンの反ユダヤ主義的言辞は読者の心を捉えていたのである。

一九〇五年革命ののち、政治情勢が激変し、ポグロムが頻発するなかで反ユダヤ主義も新たな展開を見せる。こ

の動きを推し進めたのが、黒百人組に代表される、新たに登場した急進的な保守勢力であった。彼らは専制と正教の護持を絶対視し、十月詔書を拒絶した。十月詔書への反撥はユダヤ人の政治的危険性への警戒と結びつく。ユダヤ人組織は体制にとって脅威であるという共通認識ができ、ニコライ二世もそれに囚われていた[63]。その一方で黒百人組は、一般庶民がユダヤ人に対して持っている偏見もよく理解していた。彼らにとってユダヤ人は諸悪の根源であり、専制を脅かす革命家の供給源であるとともに民衆を搾取する資本家の供給源でもあった[64]。このような見方を共有する『ノーヴォエ・ヴレーミャ』も黒百人組を支持していた[65]。

この黒百人組によって目の敵にされたのがヴィッテである。革命後、ヴィッテはニコライに十月詔書を出させて政治体制の変容をもたらした。しかも彼はユダヤ人に対して寛容であった（彼の妻マチルダはユダヤ人であった）。ヴィッテにとって、ユダヤ人の革命運動への参加は経済的困難や行政機関のいやがらせ、法的差別によるのであるから、彼らの生活条件を改善し、ゆっくりと時間をかけて同化・平等化を実現するのがよい。迫害はロシアの国際的イメージを悪くし、ユダヤ人資本家の投資を妨げるがゆえに、ロシアの経済発展に有害であるとされた[66]。このようなヴィッテの姿勢は、黒百人組には到底受け入れられるものではなかった[67]。

黒百人組の代弁者ともいうべき論客がB・A・グリーングムトである。カトコーフの後を継いで『モスクワ報知』紙を編集していたグリーングムトは、一九〇七年に出したパンフレットで、一九〇五年革命後の危険な政治情勢を作り出した首謀者として、ユダヤ人を激しく攻撃した。グリーングムトによれば、ロシアの革命を主導しているのは理想主義的なロシア人ではなく実利的で計算高いユダヤ人であった。ユダヤ人が無知で軽率なロシア人を操って革命を起こすのである。革命に対する唯一の防波堤であったプレーヴェの死後に起こった一九〇五年の出来事は、ロシアにとって大いなる災禍であった[68]。シーポフやペトルンケーヴィチ、ロジコフらゼムストヴォ自由主義者

が革命の成果を喜び、空疎な言辞を弄んでいる間に、ユダヤ人がロシア全体を思いのままに動かす準備をしている。グリーングムトにとって、革命によって再び政治の表舞台に登場し、自由主義的改革によってユダヤ人の政治活動に道を開いたヴィッテは、ユダヤ人の手先であり許しがたい存在であった。[69]

従来、保守的言論人は概してユダヤ人に対する警戒心を持っていたが、それぞれのユダヤ人観には少なからぬ差異があった。しかし、その差異は時とともに薄れていった。ユダヤ人の政治的危険性を重視する知識人の見方と、大衆の中の反ユダヤ主義的偏見とが融合し増幅し合って、帝政末期の反ユダヤ主義的言論を作り上げていった。

五　おわりに

一八八七年八月のカトコーフの死は、一八八〇年代までロシアに存在していた、安定した形状をもつ国家と宗教が変容し始めるのと時を同じくしていた。それ以後、カトコーフに代わって保守的言論を主導するメシチェルスキーとスヴォーリンがとった方向性はかなり異なっている。最も顕著な違いは戦争をめぐって現れた。メシチェルスキーにとって範とすべきはアレクサンドル三世時代であった。何より平和を重視し、他国に干渉しなかったからである。[70] もとより彼は絶対的平和主義とは無縁であった。国家がある限り戦争はつきものであり、非武装は単なる理想論でしかない。ドイツとの間に関税戦争が起こったとき、メシチェルスキーはアレクサンドル三世に対して、実際の戦争を恐れて国益に反する譲歩をしてはならないと説いている。[71] しかし、現在の状況下で専制という伝統的な統治形態を守るには軍事衝突の回避が必要であった。この態度は舞台が極東に移っても変わらなかった。メシチェルスキーはニコライ二世に対して極東の放棄を助言した。たとえ日露戦争に勝利しても列強の干渉を招くことになり、新たな戦争は避けがたいというのである。メシチェルスキーは戦争の回避を説き、開戦後は旅順陥落の前か

ら講和を求めてニコライの不興を買った。[72]

スヴォーリンはそうではなかった。露土戦争時の従軍記事で『ノーヴォエ・ヴレーミャ』を躍進させたスヴォーリンは、もともと西アジアやバルカン半島への関心が強く、ロシアの極東進出を積極的に支持してはいなかった。[73] それにもかかわらず、日露戦争が始まると彼は戦争の意義を認め、その継続を支持した。[74] 一般民衆が戦争の負担に苦しんでいることを認識してはいたものの、また相次ぐ敗北の報に接しつつも、勝利に至るまで戦争完遂を求める論調そのものは変わらなかった。その立場から彼はメシチェルスキーの早期講和論を批判し、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』はサハリン南部を日本に譲ったポーツマス講和条約の締結に不満を唱えた。[75]

こうした態度の違いは第一次世界大戦前夜まで変わることがなかった。一九〇八年にオーストリア＝ハンガリーがボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合し、セルビアとの関係を緊張させたときも、メシチェルスキーは干渉回避を望んだ。併合はとりたてて騒ぐほどのことではなく、オーストリア＝ハンガリーと事を構えてまでセルビアの味方をするのは愚かなことであった。[76] 世論の流れが次第に反独へと傾いていくなかで、メシチェルスキーはドイツとの関係悪化を危惧し、危機の原因をロシアが英仏と接近したことに求めた。[77] この点では黒百人組もメシチェルスキーに近い。外国に対する猜疑心が強く、対外関係においては基本的に孤立主義の立場に立つ黒百人組は、軍事予算、特に海軍予算の削減を支持していた。[78]

『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の立ち位置は異なっていた。もともとスヴォーリンには、他の保守的メディアのような固い伝統的価値へのこだわりがなく、その分自由に英仏との接近に向かう世論の流れに従うことができた。また『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の論調はスヴォーリンの思想をそのまま反映するものではなかった。スヴォーリン自身がそのような紙面のあり方を容認していたのである。こうしたことが同紙の柔軟な動きを可能にした。一九一

一年九月に株式会社化し、スヴォーリンが編集から手を引いた『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は、[79]積極的な対外政策支持へと円滑に移行していった。それによってこの新聞は最後まで読者の支持を獲得し続けたのである。これはメシチェルスキーの『市民』が時代から取り残され、読者を失っていったのと対照的であった。[80]

保守的メディアの言論においてはロシアという国家の形と威信を守ることが最も重要な命題であった。しかし時代とともに汎スラヴ主義的・反ユダヤ主義的傾向を持つ世論の比重が高まり、保守的メディアとしてもこれへの配慮を求められることになる。ときにはツァーリ自身が世論に同調することさえあった。保守的言論人は、しばしば矛盾を孕む二つの要請の間で立場を選択しなければならなかった。本稿で取り上げたカトコーフ、メシチェルスキー、スヴォーリンの三人は、それぞれが異なった仕方でこの問題に対応したのであり、彼らの思考と行動の様式は、ロシア保守主義の持つ異なった傾向を代表しているということができる。

本稿で明らかにしたように、ロシアの保守派を一括してリベラルに対置するだけでは、その政治的・歴史的な意味を正しく捉えることはできない。その多様性に十分配慮しつつ、それがいわゆるリベラルの言論とどのように交錯していったかについて、精密に検討することが必要である。その交錯の過程が具体的に示されるとき、本稿で取り上げた論点の意味もより明確になるであろう。

(1) *Христофоров И. А.* "Аристократическая" оппозиция Великим реформам. М., 2002. С. 259-260. 竹中浩『近代ロシアへの転換——大改革時代の自由主義思想』(東京大学出版会、一九九九年)一九九—二〇〇頁および同『模索するロシア帝国——大いなる非西欧国家の一九世紀末』(大阪大学出版会、二〇一九年)二六—二八頁も参照。

(2) メシチェルスキーと帝室の関係については以下を参照。*Мещерский В. П.* Письма к императору Александру III. 1881-1894. М., 2018; Князь В. П. Мещерский и российский Императорский дом. Документы и материалы (1863-1913). М., 2018.

(3) *Карцов А. С.* Русский консерватизм второй половины XIX-начала XX века. Князь В. П. Мещерский. СПб., 2004. С. 285-

286, 288.

（4） Там же. С. 260-261.

（5） この三人については、さしあたり竹中『模索するロシア帝国』四一―四三頁を参照。

（6） 十九世紀中葉までの汎スラヴ主義については、Michael Boro Petrovich, *The Emergence of Russian Panslavism, 1856-1870* (New York, New York, 1956), ch. 1を参照。

（7） Ibid., p. 268.

（8） Ibid., pp. 269-271. 日本におけるダニレーフスキーについての先駆的紹介として、鳥山成人『ロシアとヨーロッパ―スラヴ主義と汎スラヴ主義』（白日書院、一九四九年）がある。

（9） *Христофоров*. Указ. соч. С. 263-264.

（10） Petrovich, op. cit., pp. 126, 236.

（11） *Фадеев Р. Ф.* Мнение о восточном вопросе // Кавказская война. М., 2003. С. 382-385, 436.

（12） Там же. С. 395-397; Petrovich, op. cit., pp. 273-274, 281.

（13） Alexis Heraclides and Ada Dialla, "The Balkan Crisis of 1875-78 and Russia: Between Humanitarianism and Pragmatism," in: *Humanitarian Intervention in the Long Nineteenth Century: Setting the Precedent* (Manchester, 2015), p. 183.

（14） 竹中『模索するロシア帝国』三〇―三一頁。

（15） *Хевролина В. М.* Власть и общество: борьба в России по вопросам внешней политики, 1878-1894 гг. М., 1999. С. 41.

（16） *Карцов*. Указ. соч. С. 263-265.

（17） Там же. С. 266-267.

（18） George F. Kennan, *The Decline of Bismarck's European Order* (Princeton, 1981), pp. 107, 113-114.

（19） *Катков М. Н.* Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1885 год. М., 1898. С. 33-34; *Хевролина*. Указ. соч. С. 44.

（20） W. N. Medlicott, "The Powers and the Unification of the Two Bulgarias, 1885: Part II," *The English Historical Review*, no. 214 (Apr., 1939), pp. 281-282.

(21) *Хевролина.* Указ. соч. С. 45-46; Kennan, op. cit., pp. 144-145.

(22) *Катков.* Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1885 год. С. 602-603.

(23) Kennan, op. cit., p. 148-149.

(24) Ibid., p. 173; *Хевролина.* Указ. соч. С. 46-47.

(25) *Мещерский В. П.* Князь Мещерский. Воспоминания. М., 2001. С. 600-602.

(26) *Карцов.* Указ. соч. С. 278-279.

(27) Там же. С. 276-277.

(28) Там же. С. 261-262, 277-278.

(29) *Хвостов В. М.* Проблемы истории внешней политики России и международных отношений в конце XIX-начале XX в.: избранные труды. М., 1977. С. 220-221.

(30) Kennan, op. cit., pp. 95, 170-172.

(31) *Катков М. Н.* Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1886 год. М., 1898. С. 387-388; Kennan, op. cit., p. 176.

(32) *Карцов.* Указ. соч. С. 271.

(33) *Хевролина.* Указ. соч. С. 111, 113.

(34) Kennan, op. cit., p. 157; *Хевролина.* Указ. соч. С. 106.

(35) *Хевролина.* Указ. соч. С. 106-107.

(36) *Суворин А.С.* Дневник Алексея Сергеевича Суворина. М., 1999. С. 64-65.

(37) Там же. С. 108.

(38) Там же. С. 109-110; *Динерштейн Е. А.* А. С. Суворин: Человек, сделавший карьеру. М., 1998. С. 75.

(39) Kennan, op. cit., pp. 274-276.

(40) *Катков М. Н.* Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1887 год. М., 1898. С. 124-126.

(41) William Leonard Langer, *The Franco-Russian Alliance, 1890-1894* (Cambridge, Mass., 1929), pp. 392-393.

(42) *Черникова Н. В.* Портрет на фоне эпохи: Князь Владимир Петрович Мещерский. М., 2017. С. 262.

(43) *Хевролина.* Указ. соч. С. 115-116.
(44) *Суворин А. С.* В ожидании века XX: маленькие письма 1889-1903 гг. М., 2005. С. 27.
(45) Там же. С. 31, 33-34.
(46) Там же. С. 36-37.
(47) *Хевролина.* Указ. соч. С. 117.
(48) *Карцов.* Указ. соч. С. 262, 279-280.
(49) Там же. С. 269-270, 280.
(50) Там же. С. 287.
(51) John Doyle Klier, *Imperial Russia's Jewish question, 1855-1881* (Cambridge, 1995), pp. 155-156.
(52) *Кудрявцев В. Н.* М. Н. Катков и В. П. Мещерский: Альтернативные варианты подхода к «Еврейскому вопросу» в русской консервативной публицистике второй половины XIX века // Вестник Томского государственного университета. История. 2021. No. 72. С. 142-143.
(53) Sergei Podbolotov, "True-Russians' against the Jews: Right-Wing Anti-Semitism in the Last Years of the Russian Empire, 1905-1917," *Ab Imperio,* 2001, No. 3, p. 199. もっとも宗務院総監であるポベドノスツェフは改宗ユダヤ人を信用せず、政府も教会もユダヤ人を改宗させることには消極的であった。I. Michael Aronson, "The Attitudes of Russian Officials in the 1880s Toward Jewish Assimilation and Emigration," *Slavic Review*, vol. 34, no. 1 (Mar., 1975), p. 17.
(54) 一八九三年以降、改宗ユダヤ人が正教徒の名前に改めることは禁じられた。Podbolotov, op. cit., pp. 197-198.
(55) *Мещерский.* Письма к императору Александру III. С. 661.
(56) Там же. С. 662.
(57) *Кудрявцев.* Указ. соч. С. 143.
(58) *Динерштейн Е. А.* А. С. Суворин: человек, сделавший карьеру. М., 1998. С. 92.
(59) *Суворин.* В ожидании века XX. С. 199-201; C. C. Aronsfeld, "Jewish Bankers and the Tsar," *Jewish Social Studies,* vol. 35, no. 2 (Apr. 1973), pp. 95-96.

(60) *Суворин*. В ожидании века XX. С. 482-483.

(61) Там же. С. 629.

(62) Там же. С. 638-640, 647-649.

(63) Walter Laqueur, *Black Hundred: The Rise of the Extreme Right in Russia* (New York, New York, 1993), pp. 12, 19.

(64) Ibid., p. 16.

(65) Ibid., p. 27.

(66) Daniel Gutwein, "Russian 'Official Antisemitism' Reconsidered: Socio-Economic Aspects of Tsarist Jewish Policy, 1881-1905," *International Review of Social History*, vol. 39, 1994, pp. 204-205. この論文は、ヴィッテとプレーヴェのユダヤ人政策を、重商主義と有機的経済理論という、依拠する経済理論の違いによって二人の説明している。

(67) Laqueur, op. cit., pp. 20, 27. 黒百人組はヴィッテの暗殺さえ企図したといわれる。

(68) *Гринмут В. А.* Русские и Евреи в нашей революции. М., 1907. С. 8, 10.

(69) Там же. С. 14-15.

(70) *Кардов*. Указ. соч. С. 274.

(71) Там же. С. 287.

(72) Там же. С. 273-275.

(73) *Динерштейн*. Указ. соч. С. 83-84. スヴォーリンはドイツに対抗してオスマン帝国との関係を強化することを主張していた。竹中『模索するロシア帝国』二〇九―二一〇、二一六頁を参照。

(74) *Суворин А.С.* Русско-японская война и русская революция: маленькие письма 1904-1908 гг. М., 2005. С. 153-157, 169-172.

(75) Там же. С. 172-174; *Динерштейн*. Указ. соч. С. 84-86.

(76) *Кардов*. Указ. соч. С. 283; *Медоваров М. В.* Кризис Австро-Венгрии и русская консервативная мысль накануне Первой мировой войны // Вестник Нижегородского университета им. Н.И. Лобачевского. История. 2015. No. 1. С. 73-74; *Бестужев И.В.* Борьба в России по вопросам внешней политики 1906-1910. М., 1961. С. 244-245, 276, 289.

(77) *Беспужев*. Указ. соч. С. 297.

(78) Laqueur, op. cit. p. 26.

(79) David R. Costello, "*Novoe Vremia* and the Conservative Dilemma, 1911-1914," *The Russian Review*, vol. 37, no. 1 (Jan., 1978), pp. 34-35.

(80) *Карцов*. Указ. соч. С. 283-284.